

# 樋口一葉「闇夜」論 —異質空間におけるお蘭の逆転性—

黄鈺潔 北京外国語大学 日語学院

sharonhuangcan@163.com 18801159231

## 一、はじめに

樋口一葉の「闇夜」は明治二十七年七、九、十一月「文学界」に発表され、一葉作品の分岐点に位置する作品であると考えられている。また「闇夜」も、一葉が、五月一日に丸山福山町に転居しての第一作であるため、一葉文学において特別な位置を占めると言われている。小説の主人公松川蘭は、父の自殺後、残された二人の召使い一佐助夫婦と、不気味に変わった松川邸で寂しい日々を送っていた。元許婚であった波崎はお蘭を裏切って、衆議院議員として立身出世の道に専念した。ある夜、不遇の青年直次郎が、波崎の車にはねられ、松川邸に運び込まれた。お蘭と出会った直次郎はお蘭に恋し、のちに、自分の思いを彼女に告白した。彼の気持ちを受けたお蘭は、波崎暗殺を提案した。お蘭を愛している直次郎は躊躇なく直ちに引き受けた。のちに、暗殺を実行してみたが、結局失敗してしまった。文の最後、お蘭と佐助夫婦は松川邸から姿を消してしまったと結末した。少し複雑なあらすじであるが、主人公お蘭ともとの許嫁であった波崎、純粋な少年直次郎三人の葛藤をつぶさに描き出した。

従来の視点では、「闇夜」を樋口一葉の文学世界の分岐点として位置付け、その重要性が説かれている。したがって、「闇夜」は一葉文学にどういう位置を示しているかを解明するには、その前後の作品を考慮に入れる必要があるのではないだろうか。

明治二十五年三月処女作「闇桜」を皮切りに、「別れ霜」（二十五年四月）、「五月雨」（二十五年七月）、「経づくえ」（二十五年九月）、「うもれ木」（二十五年十一月）、「暁月夜」（二十六年二月）、「雪の日」（二十六年三月）、「琴の音」（二十六年十二月）、「花ごもり」（二十七年二月）が次々発表され、作家である一葉の名がどんどん広がっていった。二十七年十一月「闇夜」を一転換点として、十二月「大づもり」、翌年一月「たけくらべ」の発表は一葉文学の頂点に達し、のちの「奇跡の十四月」を開いた。したがって、「闇夜」はこれまでの試作を一段ときれ、成熟な文学作品を生み出すという転換点に立っており、その変身の要因を解明する必要がある。

これまで樋口一葉文学を研究する論文が山ほど積もっているが、中には「闇夜」に絞って論説したものがそれほど多くない。多くの研究者は一葉の「奇跡の十四月」に視線を寄

せ、特に代表作である「たけくらべ」や「にぎりえ」に大いに関心を集めているあまり、初期の試作にはよほど興味を持っていないのが事実である。

これまでの研究は「闇夜」を一葉文学の転換点に位置付け、その重要性を説いていることは前述にも述べてあったが、「闇夜」に対する研究視座がそれぞれ異なっている。「闇夜」論の中に、ヒロイン松川蘭におけるキャラクター分析が最も行われている。彼女に隠された「魔」的性質がこれまでの一葉作品における無力な教養のある女性と区別し、かえって妖しい女性的魅力が輝いている。中山清美は『「闇夜」と『文学界』』で、明治二十年代の中頃「文学界」に登場した新しい女性作家とその女性の手による小説テキストに目線を投じた。幸田露伴の「対髑髏」を借りて、「文学界」同人達が美の内に謎と魔的なものを秘めた女性像を好んで描いていくという傾向を言及した。「闇夜」のヒロインであるお蘭自身に妖しい、恐ろしい「魔女」的性質を掘り出し、同時代における男性作家の書いた「魔女」的女性キャラクターとの共通点を証明しながら、そこから逸脱したお蘭の特質をも提示した。当時、問う男の側の物語「対髑髏」のような作品と違って、「闇夜」は語る女の側の物語として書かれてこそ、男性作家達が試みていた妖しい女性像からお蘭が抜き出していた要素になる。

「闇夜」の主人公であるお蘭における人物分析のほか、お蘭と元婚約者であった波崎との関係を中心に検討するものもある。西村英津子は「樋口一葉『やみ夜』論-格差社会の<闇>を読む-」で、従来主人公松川蘭に視線を集中するばかりでなく、直次郎とお蘭を赤ん坊の頃から見守ってきた佐助夫婦をも検証し、松川邸に生きている全ての人物によって構造された新たな人間関係を整理した。ことに、お蘭の元婚約者であった波崎への執着を愛情感覚ではなく、相手と結婚することによって女性自身の立身出世を遂げると「婚姻戦略」の視点で提示している。このジャンルでは、関良一の研究がその代表的な成果である。関良一は「闇夜」を一葉の社会への痛烈な抗議として読まれ、政治社会の頹廢に取材した本格的な社会小説と説いた。

また、人物分析に基づいた研究方法とは別に、作品に構造された空間の概念を導入し、異質空間を前提とする新たな研究姿勢を提供したのは塚本章子の「樋口一葉『暗夜』論-交錯する『闇』の諸相-」である。「暗夜」に見られる人間を操りさえしている「魔」なるものと、その怪なる靈気が多々用意怪を継承しようとした試みであり、さらに、利欲優先で不公平な明治社会への批判をも論じてみた。さらに、前田愛「一葉の転機—『闇夜』の意味するもの—」は新たな視点を提示した。この論文では、久佐賀義孝との接触が一葉の生活に変化をもとらしたため、ロマネスクに満ちた初期小説から、一葉の転機を示すものとして「闇夜」を位置付けた。また、「闇夜」を「源氏物語」の蓬生の巻のパロディーとして、松川屋敷に潜在する破滅意識をも言及した。

以上述べたように、従来の研究によって、主人公松川蘭自身に隠されている魔性、妖しい内面、ないしは彼女における政治的欲望を手掛かりに、それまで一葉作品におけるヒロインと区別し、「闇夜」を一葉文学の転換点とみなされている。しかし、この二点のみで松川蘭の独特性を論じるのが少し物足りないのではないかと私が思っている。それに、登場したすべてのキャラクターを別々に検討するため、各々单独的に考察するとともに、互いの連動性を考えながら、全体的な人間関係図を構築する姿勢も不可欠ではないだろうか。さらに、人物が生きている環境、つまり、空間という背景において、テキスト分析がまだ十分に行われているとは言い難い。したがって、本稿は松川邸という世俗的世界と分離された異質空間を大前提として、またこの異質空間に生きているヒロイン松川蘭自身における逆転性を描いた上で、新たな「闇夜」論を試論する試みである。

## 二、「闇夜」における二つの異質空間

取りまはしたる邸の広さは幾ばく坪とか聞えて、閉ぢたるまゝの大門はいつぞやの暴風雨をそのまゝ、今にも覆へらん様あやふく、松はなけれど瓦に生ふる草の名の忍ぶ昔はそも誰とか。中略。秋風さむし飛鳥川の淵瀬こゝに変わりて、よからぬ風説は人の口に残れど、余波いかにと訪ふ人もなく、哀れに淋しき主従三人は、都ながらの山住居にも似たるべし。

中略。

もとより広き家の人気すくなければ、いよいよ空虚として荒れ寺などの如く、掃除もさのみは行きとどかぬがちに、入り用のなき間は雨戸をそのまゝの日さへ多く、俗にくださし河原院もかくやとばかり。<sup>1</sup>

「闇夜」の冒頭部の引用から、松川屋敷の風景が一覧できる。松川屋敷の元所有者であった松川蘭の父親が自殺して以来、家柄が直ちに頹廃しており、大門が常に閉じられて、外の世界と隔絶されてしまう。乱暴な嵐に打たられた危うい大門、松もなく草が恣意に生えている乱雑な庭園、主従三人を除いて誰も訪れてこない現状などの描写から、頹廃で、人気のない松川屋敷、お蘭と召使いの佐助夫婦が外部世界と隔てられ、静かに暮らしている様子が表されている。

この冒頭部の引用によって、「闇夜」のテキストが依拠している一つの前提、ないしは、文の背景である松川屋敷の風景が鮮明に描き出された。もう一步進めば、ストーリーの発端と進展を、松川屋敷という荒廃で生気のない空間、つまり、死と闇の世界において見守

---

<sup>1</sup> 「全集樋口一葉・第一巻小説編一」、小学館、昭和五十四、217-218。

らねばならぬ。この世界は、松川邸の外の世界、つまり、世俗的社会とはっきり分けられ、この意味では、一般社会に適用されるモラルやイデオロギーは松川邸においてまったく通用しないことは言うまでもない。ここまで何回繰り返し言いたいのは、松川邸が普通の俗世界から疎遠され、作中人物のためにしか作り出さないことである。したがって、作中の人物の行動とそれぞれの心理的動向を検討する際、松川屋敷の風景を一重の特別な空間として視野に入れない限り、人物の深層心理への解読には達しかねるかもしれない。

もう一つの空間はお蘭の父親が自殺した場所、古池によって構造された。

直次が驚愕に青ざめし面を斜見下ろして、お蘭様は冷やかなる眼中に笑みを浮かべて、「水の底にも都のありと詠みて帝を誘ひし尼君が心はしらず、我が父はこの世の憂きにあきて、何処にもせよ静かに眠る処をと求め給ひしなり。波は面にさはぐと見ゆれど、思へばこの底は静なるべし。世の憂き時のかくれ家は山辺も浅し海辺もせんなし、唯この池の底のみは住みよかるべし」。<sup>2</sup>

次の第十節に直次郎の言葉を借りて、再び古池が言及された。

“いづぞや奥庭に遊びし時、お池に親旦那が御最後を承りしが、この底のみは浮世の外の静けさならんと仰せられし、あれをば今に忘れませぬ。”<sup>3</sup>

引用部によって、古池の暗示した両面性を捉えることができる。この古池への描写は前述した松川屋敷の風景と微妙に一致している気がするが、松川屋敷の大門は現実で世俗的世界と物語の死と闇の世界を二分化しと同じく、古池の面を一面の鏡として、水面上の松川屋敷の日常世界と水面下の（父親）が永遠に寝てしまった世界と分離された。つまり、水面上はお蘭たちが生きている世界を意味し、一方、池の底はお蘭の父親が眠っている場所であり、世俗社会から隔離された夢の世界を指し示している。すなわち、水面上は「生」の場所、池の底は「死」の地と意味している。水面上の松川屋敷は主人公お蘭、直次郎、佐助夫婦らが生活している世界であり、つまり、生きている人々の日常世界として、「生」を意味しているのである。しかし、お蘭の父親が自殺したこの静寂な古池はあくまで「死」の息吹を帯びており、まさに松川屋敷の雰囲気と対極であると言えるだろう。それに、この「生」と「死」のつながりは池の面であり、波、いわば浮世の騒ぎを通して、やがて「生」の世界から「死」の終焉地に辿られる。まったくお蘭の父親と同じく、自殺によって、ようやく浮世の束縛から脱出し、永遠の眠り場を見つけた。

---

<sup>2</sup> 「全集樋口一葉・第一巻小説編一」、小学館、昭和五十四、233。

<sup>3</sup> 「全集樋口一葉・第一巻小説編一」、小学館、昭和五十四、245。

もう少し補足したいのは、松川屋敷の日常風景はその外の世界と絶対同じように捉えるわけにはいかない。確かに、お蘭たち生きている人々によって、松川邸における「生」の意味を帯びているにもかかわらず、一般社会のように世俗的価値観のもと生き生きしい「生」とは別問題である。では、松川邸の「生」はどういう点で世俗的社会の「生」と区別するかという問題を解明するため、主人公お蘭の心理状態を捉えなければならない。

### 三、異質空間に生きているお蘭の逆転性

お蘭という人物を一読したところ、結構独特で魅力のあるキャラクターと印象深かった。これまで一葉作品におけるヒロインのイメージとまったく違って、無力で常に憂いを帯びた少女ではなく、冷静で知恵のある女性として書かれている。

お蘭という人物の言動から見ると、とても女性らしく振舞っているとは思っていないだろう。特に恋への女主人公の態度は、これまで一葉作品のヒロインと異なり、逆転的な特質を示しているとも言えるだろう。男性に依頼しているばかりで、躊躇なく相手に主導権を譲った伝統的な女性のイメージを捨てて、お蘭は終始にして元許嫁波崎漂との関係を冷静にかつ客観的に扱っている。父の自殺によって松川家がまもなく衰えているせい、お蘭と波崎の婚約が解除されたにも関わらず、お二人はまだ連絡があることが原文から提示された。お蘭はなぜ我慢しつつ、波崎との密会を続けていくかはっきりと書かれていないが、彼女は自分と波崎の関係を傍観者としての目で冷静に考えていることが原文からわかる。波崎から別荘で密会すると要請された手紙をもらった時、「これ見よおそよ、波崎さまは相変わらずお利口なりとて、さのみは喜びもせぬお蘭が顔を不審気に守りて」<sup>4</sup>と書かれた。波崎の意図を看破したお蘭は少しでも未練せず、かえって「お利口なり」と皮肉な言葉を口に出した。「つれなしとても一向のかき絶えは世にあるならひと諦めもある物を、憎くき男の地位にほこりて何時まで我れを弄ばんとや」<sup>5</sup>と書かれた通り、波崎への返事には、彼への失望、嫌悪、怒りなどがつぶさに表現された。のちに、波崎暗殺を直次郎に示唆したお蘭は格別な一面をあらわれ、いわば「我れながら女夜叉の本性」が浮かんできた。

「闇夜」に描かれたお蘭の振る舞いから、恋における冷静な自己認識が一貫し動揺しないお蘭の性格がはっきりと伝えた。それに、見た目による無力さとは正反対に、お蘭は終始主導権を握って周りの人を思う通りに操縦していると強い意志の持ち主であろう。

---

<sup>4</sup>「全集樋口一葉・第一巻小説編一」、小学館、昭和五十四、241。

<sup>5</sup>「全集樋口一葉・第一巻小説編一」、小学館、昭和五十四、241。

その証として、直次郎の医学出世意志の打ち消しと波崎暗殺の示唆という二つの事件がある。回復した直次郎はこれからの進路について苦悩したあげく、もう諦めた医学の道を再び拾おうと考えているが、お蘭に婉曲に阻まれてしまった。医学による出世が難しいのだ、学費が結構出るだの、あれこれ現実的な理由をあげてくれた。直次郎のために思慮してくれた表には、直言してはいけない闇が潜在している。もし直次郎は医学の道に決心したならば、お蘭の身边からどんどん離れて、つまり、松川屋敷の異質空間から脱出し、世俗世界に融合しつつあるだろう。このままだと、直次郎はお蘭に設置された束縛に逃れ、結局、お蘭のコントロールに逸出するに違いない。こんなことを予測したお蘭にとって、当然に阻まなければならない。当時まだ迷っている直次郎はお蘭の話を聞いて、無論動揺し、ようやく医学の道に念を絶えてしまった。今回の事件から、お蘭の鋭い眼光、繊細な思惟と強烈な主導欲が伺えるのではないだろうか。波崎暗殺は前も述べたが、お蘭に隠された女夜叉の本性があらわに表現される一例である。波崎を暗殺する計画は確にお蘭の一種の復讐とも言え、しかし、普通の女性の復讐とまったくレベル違っている。命を狙っていること自体がもっとも残酷な復讐といえるだろう。それを決意して、それに、直次郎を利用して実行させるお蘭はこれまで一葉作品の女主人公とずいぶん異なって、一種の暗黒な異彩を放っている。

以上お蘭の行動と心理をまとめてみると、無力で柔らかい伝統的な女性のイメージを逆転し、冷静で強い女性として描かれている。ある意味で、松川蘭という人物は女の身をもっているにもかかわらず、実は男性の性格、ないしは、男性の性質が潜在している。つまり、松川屋敷の異質空間において、松川蘭のイメージも外の世俗世界に生きている女性と反逆し、女でありながら、男の気風を帯びているように、一種の異質が生じているであろう。

#### 四、終わりに

本文は「闇夜」における二つの異質空間、松川屋敷と古池を大前提として、そこに生きている女主人公松川蘭の逆転的な性質について検討を試みた。世俗社会に隔てられた松川屋敷において生と死の混沌した世界が作り出され、お蘭と直次郎、佐助夫婦の生活基盤となっている。外と隔離されたこの異質空間に暮らしているお蘭は、世間普通の女性のイメージを覆し、より自立で強い女の姿が描かれた。これまで一葉作品のヒロインとも違って、彼女たちにある無力さ、男性に依存する軟弱さなどがお蘭には見えない。そのかわりに、自分自身への冷静なる認識、主導権を握ろうとする意欲、周りの人々を思う通りに行動させる実行力など結構強い面を表す。つまり、お蘭というキャラクターは、女性意味で

はなく、男性によく見られる性格の持ち主として、一種の逆転的な性質が現れる。松川屋敷における二つの異質空間を考慮すると、お蘭のこの逆転性も驚くことではないであろう。むしろこの反逆性があるからこそ、お蘭という人物が異彩を放っているだろう。

今回は女主人公お蘭に視線を集中してばかりで、お蘭の周りの人、直次郎、佐助夫婦、および波崎にはまだ及んでいない。特に、直次郎という人物は一見としてかなり男らしく振舞っているにもかかわらず、裏には世間に立たない無力さ、躊躇なる性格、実行しようとしても虚しい失敗しか収めなかった弱さなど、世間に認められた女性意味での性格を帯びていることは、お蘭とちょうど対峙である。というように、お蘭のみならず、作中のすべての人物に視線を寄せ、孤立の場ではなく、一人一人のキャラクターがつながっているこの松川屋敷において、テキストの解説に進むと試みたい。

参考文献：

『全集樋口一葉・第一巻小説編一』、小学館、昭和五十四

『全集樋口一葉・第四巻評伝編』、小学館、昭和五十四

前田愛、『樋口一葉の世界』、平凡社、1987

中山清美、「闇夜」と『文学界』、日本文学 46 (9)、1997

塚本章子、「樋口一葉「暗夜」論—交錯する「闇」の諸相」、近代文学試論 (37)、1999

北川秋雄、「やみ夜」論—一年上の悪女—、『論集樋口一葉Ⅲ』、2002

西村英津子、「樋口一葉「やみ夜」論—格差社会の＜闇＞を読む—」、清心語文 (15)、2013